

「 憲法と日本人 」

神戸市 匿名希望

「今」という瞬間は、次の瞬間に過去になるが、新たに次の瞬間が生まれる。しかし、その瞬間もすぐに過去となる。人は、その「今」という瞬間を生きている。

これまでにこの日本という国に、多くの先人が生まれ、生き、去って行った。彼らは、それぞれの「今」を、そしてその「時代」をどう生き、何を考え、何を遺していったのか。

最初に、日本の過去を振り返ってみると、平穏な一生を送った人は少なかったのではないかと思えるほど国内における紛争が都市や地方を問わず断続的に起きていた。そのために今でいう市民は直接、間接を問わず常に争いに巻き込まれていたと言っても過言ではない。この平穏でない状態の日常が生活の中に存在していた。

次に、過去の時代の殆どが人と人との関係に上下の差が明確に存在していた社会であり、それに基づいてそれぞれの層＝身分の生活が営まれていた。そのような社会で下位の層の人たちは人間としての尊厳が希薄であり、抑圧の中での一生であったと言える。

しかし、それは社会全体がそういう体制であるために、庶民一人の力では社会全体を変えることが出来なかった。それは、そう望むことが不可能であることから生まれた時から認識させられ、多くの人がある世界の中だけで生きていくという選択肢すらも無い生き方をせざるを得なかったのである。

だが、人として生まれた以上、意識の隅の方では「人と人との関係は対等でありたい」、「争い事による家や家族を失うことがない生活を送りたい」という気持ちがあったのではないだろうか。同時に、自信の存命中にそれが叶わないのであれば、「何十年、何百年後には何の制約も無く、自由に考えることが出来、自由に生きることが出来る世の中であってほしい、」との思いを抱いたのではないだろうか。

時代が下って昭和となり、国を挙げての戦争に突入した。そこでの「国民」としての存在は何であったのか。

結果からの判断でしかないが、各戦地での戦況が悪化しても軍部は無策のままで戦力的、物資的援助も何もせず、いや、すでに支援の余力すら遺ってなく、ただ時間だけが経過していった。銃の弾の如く兵を戦場に送り、そして、その弾のように多くが戻ってこなかった。

上層部は、国民をどう捉えていたのか。又、どれだけの命と引き換えであれば、どれだけの国益が得られると考えたのだろうか。対する国民は国に対し、心の奥底ではどのように受け止め、どのように考えていたのか。また、「命」の重さを、存在することの意義をどのように捉え、どのように考え、どう心に刻み込んでいったのか。

又、戦時中はこの「命」だけでなく、「自由」についても制約があった。軍部による統制等、物的、行為的など多くの制約があり、考え方や言論に至るまで統制さ

れ、生活のすべてが戦争と一体であった。

しかし、それは終戦によってようやく終わりを告げた。そして、その翌年に「日本国憲法」が交付された。その後64年が経過したが、その間一度も改正されてなく、又、国内では一度も戦争は起きていない。

冒頭の「有史以来、生きていく上で自由を得られることが無かった。即ち『人間』でありながら、『人間』としての人生を送ることが出来なかった」数多くの人たちが抱いた「無念さ」と同時に思い描いたであろう、一生抱き続けた願望でもあり、自身が望んでも生涯叶うことがなかった「いつかは全ての人が、生きる上における強制や支配されることのない、自由で平和な社会を築きあげてほしい」という思いを後世の人に遺していったであろうと推察される。

その先人たちの悲しみ、苦しみ、怒り、挫折等の意を汲み、国民主権、人権の尊重、戦争の放棄を謳った「日本国憲法」が存在するなかで、「今」を生きる私たちが先人たちの思いを具体化させ、二度と過去へ逆戻りをさせてはならない。その為には、国民一人一人が常に正しい判断ができるよう、優れた知性と揺らぐことのない理性を習得し、この憲法を護り、後世の人につないでいかなければならない。

更に半世紀以上争いの無かったことの意義と、この憲法の存在する意味と、その関係を多くの人に伝えていかなければならない。そして、その環を広げ、持続させ、後世の人たちに送ることが現憲法により、人権を、そして自由を手にすることが出来た『今』を生きる者としての最大の責務である。